

「よそ者」「馬鹿者」「若者」 三つの「者」の意味

「よそ者」「馬鹿者」「若者」の三つの「者」によって町は活性化すると結城豊弘さんは語った。その一つ、若者の流出が地方で止まらない。

鳥取県人口移動調査によると、転入者数から転出者数を差し引いた年代別の社会増減数は、20～24歳のマイナス1107人が際立つ。これに続くのが25～29歳のマイナス330人、15～19歳のマイナス269人。いわば、大学進学、就職時の流出だ。

ただ、若者を含む三つの「者」は、あくまでも物の例えである。

『若者、バカ者、よそ者 イノベーションは彼らから始まる！』著者の真壁昭夫さんは、若者を「強力なエネルギーを持つ」者、バカ者を「旧来の価値観の枠組みからはみ出た」者、よそ者を「いままでの仕組みを批判的に見ることが出来る」者とそれぞれ定義付けた上で、こう説いた。

「決して、年齢的に年が若い、単に価値観が枠から外れているのが良いといっているわけではない。われわれ自身が、若者、バカ者、よそ者になって、社会を、企業を変革しようと叫んでいるのである」

この指摘は、結城さんが説く「日本の『地方』が消滅しないための唯一の処方箋は『始める』という気持ちなのだ」に通じる。つまり、三つの「者」とは、変革のための心根のことであり、人口減少時代に欠かせない視点だ。あくまでも、主役はわれわれ自身なのである。

年齢5歳階級別の社会増減 2021年鳥取県人口移動調査結果

区分	転入	転出	社会増減
0～4歳	604	449	155
5～9歳	299	290	9
10～14歳	121	148	-27
15～19歳	733	1,002	-269
20～24歳	1,808	2,915	-1,107
25～29歳	1,452	1,782	-330
30～34歳	1,054	1,054	0
35～39歳	809	715	94
40～44歳	540	504	36
45～49歳	506	470	36
50～54歳	382	387	-5
55～59歳	318	292	26
60～64歳	220	115	105
65～69歳	134	107	27
70～74歳	106	57	49
75歳以上	177	184	-7

※単位は人



結城 豊弘さん(60)

境港観光協会会長

プロフィール

1962年、鳥取県境港市生まれ。境高、駒澤大法学部卒。86年に読売テレビ入社、2022年に合同会社ANOSA設立。18年から鳥取大医学部付属病院特別顧問、20年から境港観光協会会長。



境港観光協会会長の結城豊弘さん(60)が読売テレビを退職し、プロデューサーとして独立した。東京、大阪を拠点にテレビマンとの二足のわらじを履き続け、全国各地を飛び回る自分自身の行動を、妖怪の一反木綿に例える。「地域に根付いて『点』を見つめることは大事だが、『面』で捉え、俯瞰しなければ本当の形は見えない」が持論。よそ者、馬鹿者、若者によって地域は活性化すると説き、脱・普通を貫く。その先にあるものとは。

(聞き手は論説委員長・深田巧)

「違う視点は？」

プロデューサーとして独立し、発足した新会社の名称は「ANOSA」。文字通り「アノサ」と読む。私の口癖だ。番組の企画会議が終わりそうになると、「あ、さあ」と切り出し、「違う視点はなの？ 有り物で番組を作ろうとしても面白くない」と後輩たちに指摘してきた。

読売テレビの番組「そこまで言っちゃって委員会NP」の担当を今年3月末まで続け、フリーとなった4月早々にBS

テレビ東の番組「石川和男の危機のカナリア」を立ち上げた。私が長年培ったアンテナ、人脈、世の中を見る目を鈍らせたくなかったので、退職前に有給休暇を消化するような過ごし方をしたくなかった。

後で知ったことだが、「アノサ」には欧州のチェコ語で「さあ、やるぞ」の意味があるらしい。まさに、みんなと違うことをやってやるという気持ちだ。

俯瞰をすること

東京、大阪の視点だけで番組作りを考えても仕方がない。常にアップデート(更新)が必要。その意味でも、全国各地へ行くようにしている。その土地で暮らす人たちと会い、コロナ禍で暮らしがどう変わったかを聞き、ウクライナ危機で避難した人たちとも交流する。そうすることで、今の日本を見ることのできるくらいに世界も見えてくる。

境港にずっと滞在しても駄目だと思っっている。地域に根付いて「点」を見つめることは大事だが、「面」で捉え、俯瞰しなければ本当の形は見えない。いろいろな人と接点を持ち、人脈を広げることも大切だ。

この夏、境港観光協会は大阪の阪神百貨店梅田本店でイベントを開き、多くの人にアピールできた。特産の白ネギを使った鉄板メニューを提案したわけだが、イベント実現の背景には大阪観光局長の溝畑宏さん、日本コナ

普通を目指すな テレビマンとの二足のわらじ



一反木綿の妖怪ブロンズ像 ©水木プロ

モン協会会長の熊谷真菜さんとの日頃からの交流がある。境港のカニやマグロの一大消費地は大阪のため、両地域の親和性は高い。2025年の大阪・関西万博に向けて連携しようと、溝畑さんと話し合っているところだ。

ヒラヒラと飛来する妖怪が、境港市出身の漫画家水木しげるさんの代表作『ゲゲゲの鬼太郎』に登場する。「一反木綿」。物事を俯瞰するため右へ、左へ飛び回る私は、この妖怪に親近感を覚える。余談だが、20年6月の境港観光協会会長就任以降、鬼太郎の顔に似ていると言われようになった。「境港の鬼太郎」と呼んでくれる人が増えた。

消滅防ぐ処方箋

「そこまで言っちゃって委員会NP」の司会者だった幸坊治郎さんは米子市の生まれ。親の仕事の関係で宮城や埼玉で育ったが、境港市出身の私と幸坊さんはいわば同郷だ。彼が15年に刊行した『東京ではわからない地方創生の真実』(ウェークアップ!ぶらぶら)取材班との共著)の巻末で、私は「『よそ者』『馬鹿者』『若者』の三つの『者』によって町は活性化すると紹介した。その町(地方)のポテンシャルに気づくのは『よそ者』であり、敏感に反応するのが『若者』だ。地方では、地元の人にはポテンシャルに気づかず、保守的な人が余りにも多い。大阪には、橋下徹さんという変わった人がいた。彼によって、ブルーシー

トが目立った大阪城公園は吉本興業の劇場が整備されるほど生まれ変わった。身を切る改革や大阪府・市の二重行政解消に取り組みむなど有言実行の政治家だった。彼への評価は二つに分かれるところだが、その町への愛があればこそ、厳しい言葉も発してしまおうかと思う。

個性を認め合う

私は9月にジャーナリストの門田隆将さんと一緒に『安倍後』を襲う日本という病』を刊行し、マスコミについて「やはり個性がないものは誰も見なくなります」と書いた。このことは冒頭に語った新会社名「ANOSA」の由来の通りで、違う視点が求められている。

しかし、地方創生には違いや個性を認め合うことも大切だ。LGBT(性的少数者)への理解を進めたい、と境港市の伊達憲太郎市長が6月に「パートナーシップ宣誓制度」を導入すると発表した。山陰両県の自治体で初めてのことだ。境港には自由な風がある。LGBTの方々が自分らしく生き生きと暮らせるよう、境港観光協会としても「LGBTツーリズム」を提唱し、実現したい。

私は18年から鳥取大医学部付属病院の特別顧問も務めている。新型コロナウィルス対応に追われ、看護師から笑顔が減ったことに気づき、ストレス解消のため映画鑑賞の開催を思い切って提案した。さらに、作家の大宮エリーさんを招いて交流会を開いた。病院改革も進めていきたいと思う。7月にあった「新鳥大病院建設推進委員会」設立記念フォーラムで、私はこう訴えた。「普通を目指すな、新しい道を進め」(臨時掲載)

編集後記



挫折の経験は？ 結城豊弘さんに聞くと、1999年の桶川ストーカー殺人事件取材を挙げた。埼玉県桶川市の路上で、元交際相手からストーカー行為に遭っていた女子大生が元交際相手の知人らに刺殺された事件。事前に相談を受けた警察が告訴を直ちに受理せず、批判が集中したわけだが、当時の結城さんは、警察発表をうのみにし「権力を疑うことを忘れていた」そうだった。裏を読むことを心掛け、常に違った視点も持つようになった。ある意味、素直ではなくなったところが、結城さん本人を「よそ者」「馬鹿者」「若者」にしているのかもしれない。